愛媛県美術館
THE MUSEUM OF ART,EHIME
No. 70
カンフォロ
Canforo
カンフォロとは？イタリア語で「くすのき」を意味します。
愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんで名付けられました。

Topics

谷川俊太郎と本の仕事を手がけた画家たち

左：元永定正《作品（62-01）》1962（昭和37）年
右上：香月泰男《朝陽》1966（昭和41）年
右下：大竹伸朗《芥子／音影Ⅱ》2008（平成20）年

コレクション展Ⅱ「コレクション・ハイライト」では、同時期開催の「愛媛朝日テレビ開局30周年記念　谷川俊太郎　絵本★百貨展」に合わせ、谷川俊太郎（1931-2024）と本の仕事をともにした当館所蔵作家の作品を、実際に手がけた本とあわせて紹介します。

1人目は元永定正（1922-2011）です。元永は、戦後の日本美術を代表する美術家集団「具体美術協会」の中心作家の一人でした。谷川と元永の出会いは、1966年のニューヨークで、二人はジャパン・ソサエティの奨学金を得て渡米し、同じアパートに暮らしていた時期がありました。帰国後、谷川は元永に絵本を作ろうともちかけ、元永の有機的でユーモラスな絵に、「もこもこ／ぱちん／ふんわふんわ」といった言葉を添えて出来上がったのが、絵本『もこ もこもこ』（文研出版、1977年）でした。《作品（62-01）》に描かれているモチーフは、絵本に登場する不思議な生命体にも見えてきます。

2人目は香月泰男（1911-1974）です。香月は、シベリア抑留の経験を題材とする「シベリヤ・シリーズ」で知られています。当館所蔵の《朝陽》も、シリーズに含まれる作品群と同様に黒を基調とし、重厚なマチエールが特徴です。そのなかで鮮やかな黄色で描かれた日の光がひときわ美しく輝いて見えます。谷川と香月は、元永と同じく1966年のニューヨークで出会いました。二人よる詩画集『旅』（求龍堂、1968年）の外函には、香月とのハドソン川上流へのドライブの思い出が綴られています。

3人目は宇和島市を拠点に制作を続けている大竹伸朗（1955-）です。当館所蔵の《芥子／音影Ⅱ》は、写真やネガ、コミックや新聞が、額内にびっしりと貼り込まれて層をなしています。画家にとっては、貼ることも描くことと同様に重要な行為となっています。谷川と大竹の初コラボレーションで生まれたのが、絵本『んぐまーま』（クレヨンハウス、2003年）です。動きと勢いのある大竹の絵に、意味を持たないリズミカルな言葉が添えられており、思わず声に出して読んでみたくなる一冊です。（宇野 茉莉花）

愛媛朝日テレビ開局30周年記念
谷川俊太郎 絵本★百貨展

2025年7月5日（土）～9月1日（月）
会場：本館企画展示室

コレクション展Ⅱ
／コレクションハイライト

2025年6月24日（火）～9月5日（金）
会場：本館常設展示室1

Collection

令和６年度新収蔵品から

山元春挙《雨松・雪松図屏風》 大正後期～昭和初期

山元春挙《雨松・雪松図屏風》

明治から昭和初期にかけ、近代京都の日本画壇を代表する画家として活躍し、竹内栖鳳と並び称された山元春挙（1871-1933）。その新発見となる素晴らしい屏風作品が、このたび寄贈されました。

ご寄贈者のお宅に所蔵される前は、愛媛県内の有力な海産問屋の旧蔵品だったと伝わり、賀陽宮家（かやのみやけ）からの下賜品という伝承もあります。それを証明する資料は残念ながら付属しませんが、春挙は「帝室技芸員」に選ばれ、皇室関係の制作も多かったので、伝承の信ぴょう性を否定する必要はないでしょう。

円山四条派の伝統を重んじつつ、写実的で雄大な風景画を最も得意とした春挙ですが、松図も繰り返し描いています。雨松と雪松を対称的に巧みな筆法で描き分けた本図は、高い品格が漂います。（長井 健）

Pickup

アトリエ再オープンに

空調工事による9か月間の休館を経て、この4月より再オープンしました。アトリエでは、版画全般から染織、木工、写真…とさまざまな創作ができます。ご予約いただくと道具と空間が無料で利用でき、材料はご持参いただくスタイルです。初めての方には、工程や必要な材料をお伝えする「アトリエ教室」を、リクエストによりお受けしています。

4月からの新しい試みとして、アトリエ教室にお申込みがあると当館HP上のイベント枠で、一緒に創作体験したい方を追加募集しています。何か作ってみたいけど…と言われる方は、どうぞ美術館講座と併せてご確認ください。

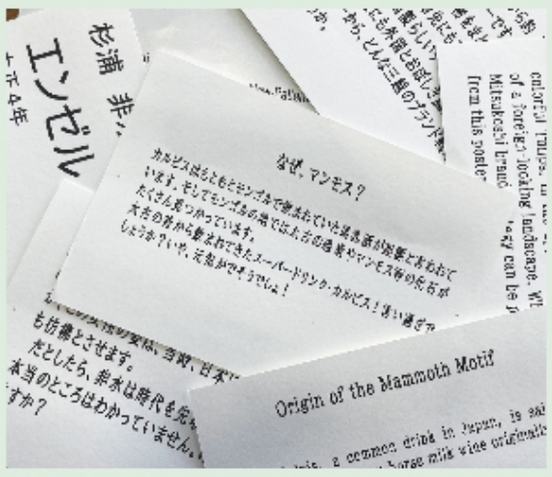
アトリエのある美術館として活動を始めて27年。まだまだ知名度は低いですが、地道に創作の輪、拡大中です。（田代 亜矢子）

Column

キャプションの中「味」

作品の横に添えられた、作品情報が書かれたカードのことをキャプションと言います。県美では、このキャプションの内容ー特に解説文について昨年度から学芸員全員で、鑑賞者のみなさんに「もっと作品を見てもらえるように」と試行錯誤を始めています。しかし、これが良い意味で大変タイヘンたいへん難しい。

例えば解説文は長ければ良いというものではありません。読むのに疲れてしまいますし、何より主役である作品が文章の「挿絵」になってしまっては本末転倒です。更に作品以外の周辺情報が多すぎるのも作品鑑賞の邪魔になります。普段の生活の中では聞きなれないような言葉がたくさんあると知的好奇心がショボン…となっていきます。



では、愉しい作品鑑賞とはどういうものなのか。「正解」などないとわかっていながら、かつてキャプションと鑑賞について語ってくれた大大大先輩からの手紙がふと目にとまりました。そこにはこう書かれていました。

『もし情報を出すのなら、作品をもう一度みようと思わせるような、あるいはその情報を得た事で、作品についてもっと考えてみたいと思わせるような情報が大切。そんな情報がそこに在れば「ええ？マジっすかあ～！」と、みている人はもう一度作品をみて考えてくださる。それから、「ああ、やっぱり私が思っていたとおりだ」と、鑑賞者が考えている事が確認できるような情報も有効。みることに安心感と自信が生まれます。さらに、例えば小学生と、彼らと似たような年頃の子どもを描いた作品をみるような時、「この子は、あなたたちと同い年よ」と言ったらどうだろう？作品を見る人の生活に惹き付けてみてもらう。こっちの方が大切だよね』

…読み終わって、目の前がますます霧に包まれてしまいました。挑む課題は深い。けれども大切なことだということだけは伝わってきます。一ミリでも前進したいと思います。（鈴木 有紀）

コレクション展II 森のなぞなぞ美術館VI
「あぜちさん、いしづちさん」
特別招待作家 友澤健太郎さんに故郷愛媛や本展の
制作についてアトリエにお伺いしてお話を聞きました。
聞き手/構成（喜安 嶺）

友澤 健太郎

ペインター／イラストレーター

Q1. 東京を拠点に活躍しておられますが、地元愛媛に対するお気持ちをお聞かせください。

A1. 愛媛県立松山南高等学校砥部分校の出身ですが、10代にして制作のためにとてもいい環境を与えて貰いました。いろんな分野で活躍する友人に出会え、作家としての自分をつくってくれた大切な場所です。そんな故郷から離れて生活すると、ときどき外から見た故郷の良さを感じる機会があり、その都度で故郷に新たな発見をしています。そのような物事の見方や考え方は制作活動に少なからず影響があるかもしれません。

Q2. 友澤さんの活動や作品について、ご紹介いただけますでしょうか。

A2. DIYや裁縫が得意な両親の影響か、絵に限らず、ものづくり全般が好きです。中学の時、先生やクラスのみんなに似顔絵がうけたことから、進路が決まった気がします。それから絵はずっと描いていますが、ものづくりの経験が、紙や画布に限らず、いろんなものに描く自分の作風につながっている気がします。絵やイラストを用いた表現を主に活動していますが、アイデアが出てきた瞬間のワクワクそのままをシンプルに分かりやすく描くように心がけています。

Q3. 当館のエントランスホールでのウィンドウペインティング（公開制作）も予定しています。この制作についてお聞かせください。

A3. 美容室で個展を開くことになった時、お店の大きなガラスの壁に絵を描こうと思いついたのが始まりです。窓に描くのは面白く、繰り返すうちに、SNSで見た方からも依頼があり、いろんな場所に描くようになりました。制限があるなかで、その形にあわせて描くのが好きです。描く時は、その場の環境、広さ、雰囲気で描く絵や色を変えています。線のバランスを考えながら、なるべく無心で描くようにしています。

Q4. どんな展示にされたいですか。見に来られる方へのメッセージもお願いいたします。

A4. 今回は畦地梅太郎作品と一緒に展示できる機会なので、畦地さんと一緒に遊んでいる展示にしたいです。お越しの際は絵や作品を鑑賞するというより一緒に遊んでいる気持ちを共感頂けたら嬉しいです。

（友澤健太郎 インタビュー：2025年6月）

コレクション展II
森のなぞなぞ美術館VI
「あぜちさん、いしづちさん」

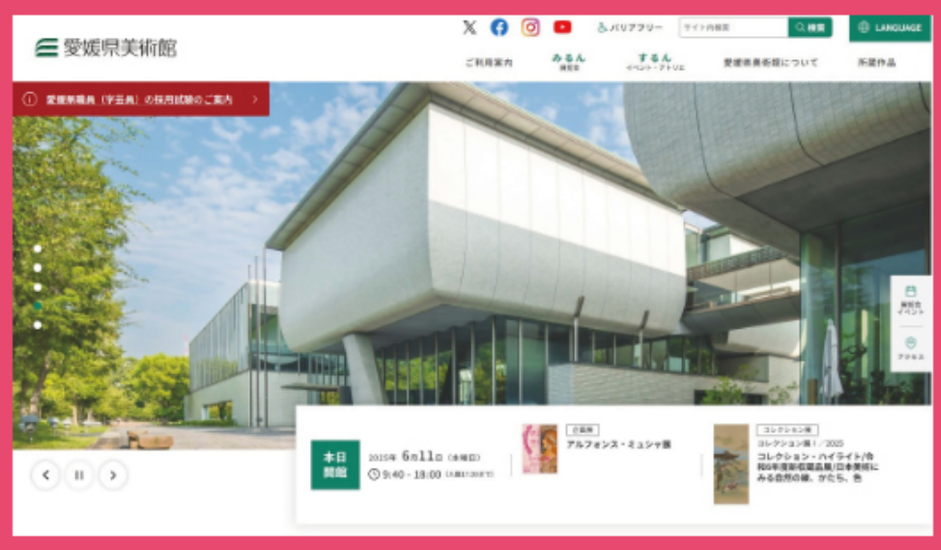
2025年6月24日（火）～9月5日（金）
会場：本館常設展示室1・2

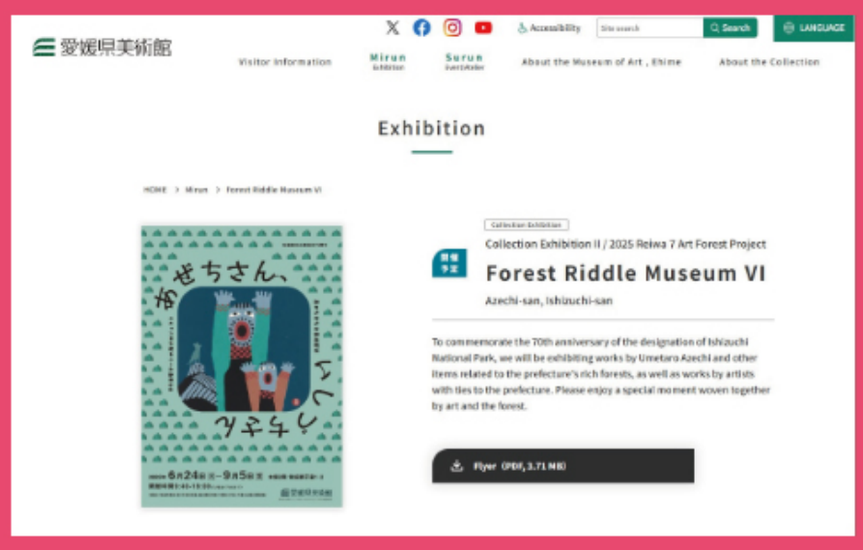
20数年ぶりに愛媛県美術館で働いております。かつてはリニューアルオープンの前後で多忙な日々を送りました。懐かしい再会もあれば他界された方々もおられ、時の流れを感じずにはいられません。どうかこの場所が訪れる皆様にとって安らぎの空間であり続けますように…。（村上 美保）

この４月に美術館に参りました。芸術をより身近に感じようと、訪問した美術館でいいなと思った作品の絵葉書を手に入れ職場のデスクに日替わりで飾っています。小さな絵葉書ですが、お気に入りの作品が目に入るたびに心のどこかがリセットされる気がします。（大野 道善）

ホームページ、リニューアルしました！

Renewal





どこでも誰でも美術館とつながることができるホームページ。愛媛県美術館の魅力を伝え、誰もが「行ってみたい！」と興味を持っていただき、日常的に訪問してもらえるホームページを目指し、リニューアルしました。

新たなホームページの顔となるトップページでは、美術館の外観・内観写真により立地場所や室内の雰囲気を味わっていただくことができます。展覧会やイベント情報などは、利用者がほしい情報がスムーズにたどりつけるようページの構成や表示を工夫し、今回、新たにインバウンドに対応した多言語ページ、所蔵品データベース、杉浦非水アーカイブが付加され、内容も充実しています。

ぜひ、来館前にホームページにアクセスして、ウェブ上で愛媛県美術館を探索してお楽しみください。（石﨑 三佳子）

▲トップページ

非水ミュージアムグッズが新登場

Column

当館が約7000点のコレクションを有する杉浦非水（1876-1965/松山市出身）による図柄をあしらった愛媛県美術館オリジナルのミュージアムグッズが3月から新登場しました。非水は大正から昭和戦前期に活躍した図案家（いまでいうデザイナー）で、当時流行したアールヌーヴォー様式をおもわせる植物や動物のモチーフやパターンが魅力の一つです。身近なものを華やかで洗練された図柄におとしこんだデザインは今に生きる私たちの生活も彩ってくれます。

金成のおすすめ

美しい曲線を活かしたモチーフが用いられた「モダンステッカーセット」（3枚組/税込880円）。キラキラの加工がされた孔雀デザインのものをスマートフォンの裏面に貼って気分を高めています。

長井のおすすめ

非水のデザインにたくさん登場する猫をあしらった「アクリルキーホルダー」（2種／税込880円）。100年前の作品とは思えないほどキュート＆クールなので、いろんなものに付けられます。

お求めは本館1Fのミュージアムショップまで！

愛媛県美術館
https://www.ehime-art.jp/
〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
tel.089-932-0010 fax.089-932-0511
美術館HP

愛媛県美術館ニュースNo.70 2025
発行日＝令和7年7月10日
発行＝愛媛県美術館
編集＝杉山はるか、金成めい
デザイン＝永木光（アート空間ヒカリデザイン）
※所蔵先の表記のないものすべて当館所蔵作品

編集後記

カンフォロも切りよく70号の発行です。今までとは少し趣向を変えていこうと、一緒に編集を担当する金成とも相談をしました。これまで以上に独自の視点を見つけて、皆様に耳より情報をお届けしたいと思っています！（杉山 はるか）